神の国のたとえ話

□第 1 回から第 8 回までの振り返り

1. 新約聖書は何を教えているか・メシアは 2 回来る
2. イエスの誕生と少年時代：誕生は紀元前 6/ 7 年、12 歳のときにはメシアの自覚あり
3. イエスの受洗と誘惑：紀元 26 年秋、公生涯の開始
4. メシア宣言とイスラエルの教師の来訪：紀元 27 年春
5. 最初のメシア的奇跡と議会調査の開始
6. 調査団の審問　安息日をめぐって（安息日に対するメシアの権威）：紀元 28 年春
7. 山上の垂訓（モーセの律法を解釈するメシアの権威）
8. 二回目のメシア的奇跡と議会調査の判定

(1) 二回目のメシア的奇跡：口をきけなくする悪霊をイエスが追い出した

(2) 議会調査の判定：「**この人が悪霊どもを追い出しているのは、ただ悪霊どものかしらベルゼブルによることだ。**」＝【イエスはメシアではない】という判定

(3) 聖霊を冒瀆する罪：イエスが聖霊の力によってメシアとしてのわざを行っているのを見ていながら、それを悪霊のかしらの力によっていると拒否するのは聖霊を冒瀆すること

(4) イエスの宣教活動における変化：指導者層による拒否を受けてから 3 つの変化

① 奇跡の目的と仕方：【メシアとしての権威を示すために。公然と、受ける側の信仰を問わず】→《弟子たちの訓練のため。公衆の面前では行わず、受ける側の信仰を確認してから。公然と行う奇跡は「ヨナのしるし」のみ》

マタイ 12：39～40　**悪い、姦淫の時代はしるしを求めますが、しるしは与えられません。ただし預言者ヨナのしるしは別です。ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中にいるからです。**

② 教え方：明確な教えから、たとえ話による教えへ。解説は弟子たちにのみ。

③ 神の国のプログラム：「メシアの王国」は将来の世代に延期され、**「奥義としての神の国」の時代に入った。**　→　「神の国のたとえ話」

□アウトライン

I.　全体像

II.　第一のたとえ話：種まきのたとえ話

III.　種まきのたとえ話に続く４つのたとえ話

IV.　弟子たちだけに語られた４つのたとえ話

Ⅰ．全体像

1.　一日のうちに連続して語られた 9 つのたとえ話：　イエスは、イスラエルの指導者層から公式にメシアではないと拒否された日、その日のうちに、９つのたとえ話を語った。群衆に対して５つ、その後で弟子たちだけにさらに４つ、合計９つである。

2.　この一連のたとえ話は、奥義としての神の国の特徴を教えるためのものである。マタイ 13 章、マルコ４章、ルカ８章に記されている。

マタイ 13：11　**あなたがた（弟子たち）には天の御国の奥義を知ることが許されています**

3.　奥義とは、旧約聖書の時代には明らかにされていなかったことで新約聖書の時代になって明らかにされたことである。

コロサイ 1：25～26　**私（使徒パウロ）は神から委ねられた務めにしたがって、教会に仕える者となりました。あなたがたに神のことばを、すなわち、世々の昔から多くの世代にわたって隠されてきて、今は神の聖徒たちに明らかにされた奥義を、余すところなく伝えるためです。**

4.　イエスは弟子たちに、最初のたとえ話がそれに続く８つのたとえ話を理解する鍵であると教えた。

マルコ 4：13　**このたとえが分からないのですか。そんなことで、どうしてすべてのたとえが理解できるでしょうか。**

II．第一のたとえ話：種まきのたとえ話　マタイ 13：3b～8、イエスによる解説 18～23

3b ～8 節　**見よ。種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いていると、種がいくつか道端に落ちた。すると鳥が来て食べてしまった。また、別の種は土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。また、別の種は茨の間に落ちたが、茨が伸びてふさいでしまった。また、別の種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍になった。**

18～23 節　**ですから、種を蒔く人のたとえを聞きなさい。だれでも御国のことばを聞いて悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪います。道端に蒔かれたものとは、このような人のことです。また岩地に蒔かれたものとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。しかし自分の中に根がなく、しばらく続くだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。茨の中に蒔かれたものとは、みことばを聞くが、この世の思い煩いと富の誘惑がみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。良い地に蒔かれたものとは、みことばを聞いて悟る人のことです。本当に実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結びます。**

1. 「種」・・・「御国のことば」（マタイ 13：19）。旧新約聖書が教える神のことばであり、その中心はメシアに関することと、メシアが提供してくださる救いの恵みに関する良き知らせ（福音）である。
2. 「種を蒔く」・・・福音、神のことばを他の人々に伝えること
3. 地面は、聞く側の人、「その人の心」の状態を表している（マタイ 13：19）。だれもが、あるいはどの地域や国々も同じように応答するのではない。地面（応答）の種別は４つある。「道端、岩地、茨の地、良い地」
4. その種まきは、**3 つの妨害**を受ける。
   (1) 「鳥」・・・「悪い者」＝**悪魔**（サタン）、心に入ったみことばを奪ってしまう
   (2) 「日が昇ると焼けて」・・・強い日差しは、この**世**での「困難や迫害」を表す。
   (3) 「茨が伸びてふさぐ」・・・「この世の思い煩いと富の誘惑」を表す。何かと心配したり、富を追い求めたりするのは、人の内側にある**罪の性質**によるものである。
5. その種まきは、**4 つの応答**を受ける。
   (1) 第一は、「道端」：不信仰の応答である。まかれた種をついばんで奪っていく鳥は、悪魔とその配下の悪霊たちである。悪魔は福音の種まきを妨害する。
   (2) 第二から第三は、信者ではあるが、実を結ぶことのない信者の応答である。第二「岩地」は世からの妨害、第三「茨の地」は罪の性質からの妨害を受ける。
   (3) 第四の応答「良い地」は、実を結ぶ信者の応答である。
6. 奥義としての神の国の時代的特徴を一言で言えば、【**福音の種まきがされる**】こと。

Ⅲ．種まきのたとえ話に続く４つのたとえ話

1.　まかれた種は自ら育つことのたとえ話　マルコ４：26～29

マルコ４：26～29　**またイエスは言われた。「神の国はこのようなものです。人が地に種を蒔くと、夜昼、寝たり起きたりしているうちに種は芽を出して育ちますが、どのようにしてそうなるのか、その人は知りません。地はひとりでに実をならせ、初めに苗、次に穂、次に多くの実が穂にできます。実が熟すと、すぐに鎌を入れます。収穫の時が来たからです。**

このたとえ話のポイントは・・・人の心の中に蒔かれた神のことばは、内側にエネルギーを持っていて、自ら芽を出し、育つ。どのようにしてそうなるのか、蒔いた人は知らない。「芽を出す」とは、人が心に蒔かれた神のことばを信じて信者となること、「育つ」とは信者として霊的に成長すること、「実が穂にできる」とは信者として霊的な実を結ぶことである。これらはすべて、神の働きであって、最初に種蒔きをした人の力によるのではない。

2.　毒麦のたとえ話　マタイ 13：24～30、イエスによる解説　36～43

(1) たとえ話（マタイ 13：24～30）には、４つのポイントがある

マタイ 13：24～30　**イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は次のようにたとえられます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。ところが人々が眠っている間に敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて立ち去った。麦が芽を出し実ったとき、毒麦も現れた。それでしもべたちが主人のところに来て言った。『ご主人様、畑には良い麦を蒔かれたのではなかったでしょうか。どうして毒麦が生えたのでしょう。』**
主人は言った。『敵がしたことだ。』すると、しもべたちは言った。『それでは、私たちが行って毒麦を抜き集めましょうか。』しかし、主人は言った。『いや。毒麦を抜き集めるうちに麦も一緒に抜き取るかもしれない。だから、収穫まで両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時に、私は刈る者たちに、まず毒麦を集めて焼くために束にし、麦のほうは集めて私の倉に納めなさい、と言おう。』」

① この前の２つのたとえ話で語られた福音宣教の種まきは、真の種まきであった。続く３つめのたとえ話、毒麦のたとえ話のテーマは、【真の種まきに対抗して、偽の種まきが巧妙に行われる】である。「毒麦」と訳されている原語が指すのは、「ダーネル（darnel）」という種類。種は本物の小麦と外観がそっくりである。種から芽生えた茎や葉もよく似ている。穂をつけて初めて、穂の

姿で見分けられる。偽の種まきは、巧妙に「福音」らしく装い、良いものに見えるというのが、ポイントである。

② 二つのタイプの種まきがされた結果、良い麦も、毒麦も、同じ畑の中で、隣り合わせて成長していく。

③ 「奥義としての神の国」の時代の終わりにおいて、判定がなされ、良い麦は選り分けられてメシアの王国に入る。しかし、毒麦は除かれる。

④ 真の種まきか、偽の種まきかは、最終的には穂をつけて良い実を結んだか、そうでないかによって明らかとなる。

(2) イエスによる解説（マタイ 13：36～43）にも、4 つのポイントがある

マタイ 13：36～43　**それから、イエスは群衆を解散させて家に入られた。すると弟子たちがみもとに来て、「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。イエスは答えられた。「良い種を蒔く人は人の子です。畑は世界で、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らです。毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、収穫は世の終わり、刈る者は御使いたちです。ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそのようになります。人の子は御使いたちを遣わします。彼らは、すべてのつまずきと、不法を行う者たちを御国から取り集めて、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。そのとき、正しい人たちは彼らの父の御国で太陽のように輝きます。耳のある者は聞きなさい。**

① 真の種まきをするのは、人の子＝メシアである。

② 畑は、この世界である。そして良い種は、御国の子たちである。御国の子たちとは、信者のことである。彼らは真理を携えて全世界に出て行く。使徒の働きに記録されているとおりである。

③ 敵は、悪魔（サタン）である。そして毒麦は、悪魔の子たち、すなわち不信者である。悪魔は、世界中にそのような人々を蔓延させる。畑とは「世界」であり、教会に限らないが、しばしば彼らは信者であるかのようにふるまう。

④ 刈り取りをする者たちは、天使たちである。この世の終わりの収穫の時とは、奥義としての神の国の時代の終了点、すなわち諸国民の裁きである。
この裁きについては、イエスは、このあと、マタイ 13：47～50「地引網のたとえ話」にて、弟子たちに語る。さらに後日、預言として、マタイ 25：31～46「諸国民（異邦人）の裁きの預言」において詳しく語る。

3.　からし種のたとえ話　マタイ 13：31～32

マタイ 13：31～32　**イエスはまた、別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国はからし種に似ています。人はそれを取って畑に蒔きます。どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなって木となり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るようになります。**

「大きくなって木となり」、外面的には大成功して見事な成長をしてきたかのように見えるが、そこには、「鳥が来て、その枝に巣を作る」。鳥は悪魔とその配下の悪霊たちである。巣を作るとは、彼らによる偽の宣教活動の方が優勢になる、ということ。

4.　パン種のたとえ話　マタイ 13：33

マタイ 13：33　**イエスはまた、別のたとえを彼らに話された。「天の御国はパン種に似ています。女の人がそれを取って三サトンの小麦粉の中に混ぜると、全体がふくらみます。**

「パン種」は罪、特に教理的な誤った教えを象徴する。奥義としての神の国は、大きく膨らむが、その内面には罪の腐敗、教理的な過ちが含まれている。「三」という数は、キリスト教会史における大きな三つの集団、西のカトリック、東の正教（ギリシア・ロシア）、そしてプロテスタントを暗示している。

【補足】教会の携挙のあと、三つの集団には真の信者がいなくなり、世界統一宗教への合流が一気に加速するであろう。大患難期前半の 3 年半の間、世界統一宗教の本部は、復興された都バビロンに置かれる。その都バビロンを、黙示録 17 章は、一人の女の姿をもって象徴して預言している。このことも、新約聖書における奥義のひとつである。

Ⅳ. 弟子たちだけに語られた 4 つのたとえ話

1. 隠された宝のたとえ話　マタイ 13：44

マタイ 13:44　**天の御国は畑に隠された宝のようなものです。その宝を見つけた人は、それをそのまま隠しておきます。そして喜びのあまり、行って、持っている物すべてを売り払い、その畑を買います。**

(1) 「宝」は、旧約聖書ではイスラエル民族を象徴する

① 出 19：5～6　**今、もしあなたがたが確かにわたしの声に従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはあらゆる民族の中にあって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民(くにたみ)となる。**

② 申 14：2　**あなたは、あなたの神、主の聖なる民だからである。主は、地の面のあらゆる民の中からあなたを選んで、ご自分の宝の民とされた。**

③ 詩 135：4　**主は、ヤコブをご自分のために選び、イスラエルを　ご自分の宝として選ばれた。**

(2) イスラエルの大部分はメシアを拒否したが、神はイスラエルに少数の信仰者を残しておられる。彼らは、レムナント、イスラエルの残れる者である。

ロマ 11：2～5　**神は、前から知っていたご自分の民を退けられたのではありません。それとも、聖書がエリヤの箇所で言っていることを、あなたがたは知らないのですか。エリヤはイスラエルを神に訴えています。「主よ。彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇を壊しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを狙っています。」しかし、神が彼に告げられたことは何だったでしょうか。「わたしは、わたし自身のために、男子七千人を残している。これらの者は、バアルに膝をかがめなかった者たちである。」ですから、同じように今この時にも、恵みの選びによって残された者たちがいます。**

(3) よって、このたとえ話で「宝」とは、【奥義としての神の国の時代におけるレムナントである、ユダヤ人信者】を指す。彼らは、ガラテヤ 6：16 では「神のイスラエル」と呼ばれる。

2. 高価な真珠のたとえ話　マタイ 13：45～46

マタイ 13：45～46　**天の御国はまた、良い真珠を探している商人のようなものです。高価な真珠を一つ見つけた商人は、行って、持っていた物すべてを売り払い、それを買います。**

(1) 旧約聖書では「真珠」が象徴するものは、特にない。教会がユダヤ人信者と異邦人信者とから成ること、この前のたとえ話では「宝」がユダヤ人信者のことであることを考えると、真珠は異邦人信者を指すと推測される。
(2) 真珠は海から採られる。「海」は、異邦人世界を象徴する（ダニ 7：2～3、黙 17：1、15）
(3) 46 節の真珠は 1 個である。真珠が貝の中で徐々に形成されるように、異邦人信者の数も徐々に増えていく。そして教会に属するべき異邦人信者の数が満ちたとき（ロマ 11：25）、教会は完成し、教会は携挙される。

3. 地引網のたとえ話　マタイ 13：47～50

マタイ 13：47～50　**また、天の御国は、海に投げ入れてあらゆる種類の魚を集める網のようなものです。網がいっぱいになると、人々はそれを岸に引き上げ、座って、良いものは入れ物に入れ、悪いものは外に投げ捨てます。この世の終わりにもそのようになります。御使いたちが来て、正しい者たちの中から悪い者どもをより分け、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。**

(1) 「海」は異邦人世界を象徴する。
(2) 奥義としての神の国は、異邦人世界の人々を「正しい者」と「悪い者」に分ける裁きをもって終了する、というのが、このたとえ話のポイントである。
(3) 前の二つのたとえ話では「宝」はユダヤ人信者、「真珠」は異邦人信者であった。彼らは大患難期の前に、栄光の体に変えられて天に行き上げられる。それが教会の携挙である。これにより、いったん地上には信者はいなくなる。その後、神は地上のユダヤ人の中から 14 万 4 千人の信者を起こし、彼らが大患難期前半の 3 年半の間、世界宣教を担い、異邦人世界に多くの信者が新たに起こされる。地引網のたとえ話は、大患難期を生き残った異邦人の人々を、この世界宣教によって神を信じた人たちと信じなかった人たちとに区分する裁きである。
(4) この異邦人の裁きは、大患難期が終了後、メシアの王国が始まるまでの 75 日間の時期に起きる出来事のひとつである。それに関する預言は、マタイ 25：31～46「諸国民の裁き」。

4.　家の主人のたとえ話　マタイ 13：51～52

マタイ 13：51～52　**あなたがたは、これらのことがみな分かりましたか。」彼らは「はい」と言った。そこでイエスは言われた。「こういうわけで、天の御国の弟子となった学者はみな、自分の倉から新しい物と古い物を取り出す、一家の主人のようです。」**

(1)　「新しい物」とは、奥義としての神の国。新約聖書で初めて啓示された。
(2)　「古い物」とは、神の国のほかの 4 つの層。旧約聖書でも知られていた。
(3)　神の国の弟子となった学者はみな、**神の国の 5 つの層**を理解する（注）。それは、一家の主人が、自分の倉から新しい物も古い物も自由に持ち出してそれぞれ正しく用いることができるようなものである。
(4)　使徒パウロの宣教において、主要なテーマは「神の国」（使徒 19：8、20：25、28：23、31）であった。その「神の国」とは、メシアの王国だけではなく、神の国のプログラム全体であり、特に「奥義としての神の国」についてであった。パウロは、神の奥義の管理者であったからである（Ⅰコリ 2：1、4：1）。

注：**神の国の 5 つの層**については、2022 年 5 月 21 日福岡集会の学びをご参照ください。

新約聖書の中の奥義　第 23 回　「奥義としての神の国」と神の国の 5 つの層